弦楽四重奏曲第1番 へ長調 作品18-1

アルファとオメガ、すなわち始まりと終わり。今回のサイクルでは初日に第1番と第16番が組合わされている。第1番の作曲は1799年(初稿)と1800年(改訂稿)。実際の作曲順では第3番に続く2番目の弦楽四重奏曲となる。初稿を友人に贈った後、ベートーヴェンは「今や弦楽四重奏曲をどのように作曲すればよいかわかった」ので、改稿したから作品が出回らないようにしてほしいと伝えている。第1楽章では簡潔な動機がくりかえしあらわれ楽章全体に統一感をもたらす。悲痛な第2楽章はシェイクスピア『ロメオとジュリエット』のラストシーンが着想源だという。この楽章はヨルゴス・ランティモス監督の異色の映画『ロブスター』(2015)に使われてささやかな話題を呼んだ(主人公が期限内に配偶者を見つけないとロブスターに姿を変えられるという奇抜な設定の愛の物語)。第3楽章は揺れるようなスケルツォ、第4楽章はフガートがピリッと効いている。

弦楽四重奏曲第7番 へ長調 作品59-1「ラズモフスキー第1番」

最初の第1番とおしまいの第16番の間に挟まれるのは中期の始まりを告げる第7番「ラズモフスキー第1番」。これで初期・中期・後期の3曲がへ長調できれいにそろう。作曲は1806年。作品59の3曲はロシアのウィーン駐在大使アンドレイ・ラズモフスキー伯爵に献呈された。「ラズモフスキー第1番」は作品59の3曲のなかでももっとも規模が大きく、第1楽章から「エロイカ」を思わせる雄大な楽想が展開される。第2楽章は神経質な雰囲気のスケルツォ、第3楽章は祈るような緩徐楽章。第4楽章でロシア民謡「ああ、私の運命よ」が引用されるのは、ラズモフスキーのリクエストに応じたのだろうか。ちなみに同じ民謡主題はアレンスキーの交響曲第1番の第4楽章にも登場する。

弦楽四重奏曲第16番 へ長調 作品135

1826年、最後の弦楽四重奏は、ベートーヴェンが完成させた最後の作品でもある。 大規模作品が多い後期四重奏曲にあって、際立って規模が小さく、楽章数も古典的な4楽章制に回帰している。さりげなく話しかけるように開始される第1楽章は軽やか。第2楽章はスケルツォ。リズミカルで楽しげなダンスが、ぶつりと遮断される。第3楽章の主題は後世にマーラーの交響曲第3番の終楽章として転生している。第4楽章冒頭には「そうあるべきか?」「そうあるべき」の謎めいた問答が記される。

弦楽四重奏曲第2番 卜長調 作品18-2

番号の上では第2番だが、作曲順では第3番と第1番に続く3番目の弦楽四重奏曲。前作の第1番が持つ構築的な性格とは対照的に、第2番はぐっと優雅で、師ヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)を思わせる古典的な均整とウィットに満ちている。第1楽章はそっと語りかけるように始まる。この冒頭部から付いたニックネームが「挨拶四重奏曲」。もっとも、語りかけるように始まるのは第1番も同じで、ベートーヴェンはしばしば発話的に曲を開始する。第2楽章はゆったりとして寛いだ雰囲気のアダージョで開始される。これにせわしなく活発な中間部が続くのは予想外の展開。第3楽章は、はしゃぎ回るようなスケルツォ。第4楽章はユーモラスで浮き立つようなフィナーレ。

弦楽四重奏曲第8番 ホ短調 作品59-2「ラズモフスキー第2番」

作品59の3曲はロシアのウィーン駐在大使アンドレイ・ラズモフスキー伯爵に献呈された。作曲は1806年。ラズモフスキーは創作力を爆発させる中期のベートーヴェンに作品を委嘱することで、3曲もの名曲に自らの名を残した。第8番は3曲中で唯一の短調作品。第1楽章は強奏により決然と始まるが、控えめに主題が奏でられるとすぐに沈黙が続く。力強い音楽の流れはしばしば遮られる。第2楽章は弟子カール・チェルニー(1791~1857)によれば夜空から着想した星々の音楽。第3楽章はクライアントの要望に応えたのか、ロシア民謡「天には神に栄光あれ」が中間部に登場する。同じ民謡はムソルグスキーのオペラ『ボリス・ゴドゥノフ』にも使われる。第4楽章は晴れやかなフィナーレ。

弦楽四重奏曲第15番 イ短調 作品132

後期四重奏曲の最初の3曲、すなわち第12番、第15番、第13番はアマチュアのチェロ奏者でもあったニコライ・ガリツィン侯爵からの依頼により書かれた。第15番の作曲は1825年。腹部の深刻な病により、作曲は一か月ほど中断されたが、医師アントン・ブラウンホーファーの厳格な指導による治療がベートーヴェンを回復へと導いた。曲はシンメトリックな全5楽章により構成される。神秘的に開始される第1楽章は峻厳。第2楽章はスケルツォ。第3楽章は名高い「病癒えた者の神への聖なる感謝の歌」。第4楽章は一転して行進曲に。オペラのレチタティーヴォ調の楽想から第5楽章になだれ込むのは「第九」を連想させる。コーダの入念さは曲の終わりを拒むかのよう。

弦楽四重奏曲第3番 二長調 作品18-3

「光と楽観主義」がテーマとなったこの日のプログラムには、活気に満ちた作品が並ぶ。作品18の6曲のうち、最初に書かれたと思われるのが第3番(1798~99)。第1楽章の流れるような冒頭主題はヴァイオリン・ソナタ第5番「春」を連想させる。第2楽章では穏やかな主題が第2ヴァイオリンで奏でられ、第1ヴァイオリンへと受け継がれる。第3楽章は揺れ動くようなスケルツォに、短調のトリオがはさまれる。第4楽章は無窮動風の快速フィナーレ。落ち着きなく跳ね回るかのよう。

弦楽四重奏曲第10番 変ホ長調 作品74「ハープ」

3曲の大作「ラズモフスキー」を書きあげた3年後、1809年に書かれたのが作品74。同時期に作曲が始まったピアノ協奏曲第5番「皇帝」、ピアノ・ソナタ第26番「告別」と同じ変ホ長調が用いられている。「ハープ」の愛称は第1楽章のピッツィカートによるアルペジオがハープを思わせるから。柔和な表情の序奏が二度の強奏で断ち切られた後、晴れやかなアレグロに突入する。静かに祈るような第2楽章、情熱的で執拗なスケルツォからなる第3楽章へ。この楽章は交響曲第5番「運命」の第3楽章を連想させる。アタッカで続く第4楽章は、「あのね」と語りかけるような主題で始まる変奏曲。ツンと澄ました調子の変奏が続くが、最後は一気に高揚して陽気を装う。

弦楽四重奏曲第9番 ハ長調 作品59-3「ラズモフスキー第3番」

ロシアのアンドレイ・ラズモフスキー伯爵に献呈された作品59の第3作。第1楽章が不協和音で神秘的に始まり、突如として雲の隙間から光が差し込むように明るい主題が登場する——というドラマティックな冒頭は、同じハ長調で書かれたモーツァルトの弦楽四重奏曲「不協和音」K. 465と同様のアイディア。第2楽章の主題は寂しげで民謡風にも聞こえる。ラズモフスキー第1番と第2番では依頼主の求めに応じたのか、出典の明確なロシア民謡の引用があった。第3番でも民謡が使われているとすれば、きっとここだろう。第3楽章はスケルツォではなくメヌエット。古典に立ち返ったかのように優雅なムードを醸し出すが、アタッカで続く第4楽章は一転してアグレッシヴだ。疾走するような主題がフーが風に絡み合いながら、スリリングに白熱する。終わりそうで終わらない長大なコーダが強烈。

弦楽四重奏曲第4番 ハ短調 作品18-4

ベートーヴェンの音楽に潜む影に焦点を当てるのがこの日のプログラム。短調作品が3作並んだ。作品18の初期の6曲のなかで、第4番 ハ短調のみは残存するスケッチ帳に記されていないが、他の作品と同時期に作曲されたと推定される。第1楽章は切迫感のある第1主題と朗らかな第2主題の対比が鮮やか。コーダまで一気呵成に駆け抜ける。第2楽章はスケルツォ。フーガ風の開始は交響曲第1番の第2楽章を思わせる。第3楽章はメヌエット。スケルツォとメヌエットの両方があるわけだが、このメヌエットにもスケルツォ的性格が感じられる。第4楽章は熱狂的なロンド。

弦楽四重奏曲第11番 ヘ短調 作品95「セリオーソ」

自筆譜には作曲者により「クァルテット・セリオーソ」と記され、ただならぬ真剣さが予告される一方、作品の長さは短く、緊密な音のドラマがくりひろげられる。1810年作曲。ベートーヴェンは「この四重奏曲は専門的な内輪のサークルのために書かれたもので、公開の場で演奏されるべきではない」と考えていた。第1楽章は荒々しく開始され、激情がほとばしる。第2楽章は時を刻むように開始され、やがて漂泊するような楽想がフーガ風に発展する。切れ目なく第3楽章へ。スケルツォの間に2つのトリオが挟まれる。トリオは凪のように穏やかだが、すぐに嵐のようなスケルツォにのみこまれてしまう。第4楽章は短い序奏に続いて、メランコリックな主題が奏でられる。これほど悲劇的な性格の作品が、よもや潑溂としたコーダで結ばれようとは。まさかのハッピーエンド……なのか?

弦楽四重奏曲第14番 嬰ハ短調 作品131

作曲順では最後から2番目の弦楽四重奏曲。1826年完成。翌年、ベートーヴェンはこの作品の出版も公開初演も目にすることなく世を去った。嬰ハ短調はピアノ・ソナタ「月光」以来の珍しい選択。7つもの楽章からなるが、これは経過的な短い楽章も含んだ数。聴き方によっては4つの部分からなるようにも思える。すなわち、Iのフーガによるアダージョを長大な序奏、Iの軽やかなアレグロを主部と見立てれば、ここまでが第1部。橋渡しのIIを経て、IVの大規模な変奏曲が第2部。活発なスケルツォ風のVが第3部。短い悲歌風のVIとエネルギッシュなVIIが第4部。切れ目のない変幻自在の長尺とも、古典的な4部構成ともみなせるのがおもしろいところ。

弦楽四重奏曲第5番 イ長調 作品18-5

ベートーヴェンはヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)の弦楽四重奏曲「ハイドン・セット」のイ長調 K. 464を入念に研究した。その研究成果とも言われるのがこの作品。K. 464と同じ調、同じ楽章構成を持つ。弾むような主題で開始される第1楽章は軽快。第2楽章は典雅なメヌエット。ひなびたトリオが挟まれる。第3楽章は主題と5つの変奏、コーダから構成される。この曲でもっとも長大な楽章。第4楽章は声部間の小気味よい追いかけっこが楽しい。

大フーガ 変ロ長調 作品133

当初、弦楽四重奏曲第13番の終楽章には、「大フーガ」が置かれていた。しかし、1826年の初演では、この複雑で長大なフーガが聴衆を困惑させる。ある批評は「中国語のようにチンプンカンプン」と記した。楽譜出版商のアルタリアは、弦楽四重奏曲第13番の終楽章にもっと小規模なフィナーレを書くようにベートーヴェンを説得し、その代わり「大フーガ」を独立した作品として出版する。ベートーヴェンは「大フーガ」のために「ときに自由に、ときに厳格に」という副題を考えていた。ベートーヴェンの死後も「大フーガ」は容易には受け入れられず、ジュリアード弦楽四重奏団の創設時の第1ヴァイオリン奏者ロバート・マン(1920~2018)の証言によれば、彼が学生だった1940年代初めになっても、多くの音楽学者や演奏家が「大フーガは五線紙の上だけで成功した大作だ」とみなしていたというほど、演奏機会がまれだった。現在では初演時のように第13番の終楽章に置かれることも珍しくないが、今回のサイクルでは第13番に先だって、独立した作品として演奏される。

弦楽四重奏曲第13番 変ロ長調 作品130 (第6楽章:アレグロ)

第12番、第15番とともにガリツィン侯爵からの依頼によって書かれた第13番は、全6楽章からなる大作である。第1楽章は荘重で厳粛なアダージョと疾走するようなアレグロを交替させながら進む。第2楽章は性急なスケルツォ風。第3楽章は「ややおどけて」と指示される澄ました表情のアンダンテ。第4楽章はたゆたうようなドイツ舞曲。第5楽章は祈るようなカヴァティーナ。第6楽章は前述のように、初演後に「大フーガ」からより小規模な舞曲風の音楽に差し替えられた。こちらは軽やかで上機嫌のフィナーレだ。同じ楽曲がふたつの世界線に分かれてまったく異なる結末を迎えるという稀有な事例がここに。

弦楽四重奏曲第6番 変口長調 作品18-6

作品18の締めくくりとなる第6番(1800)は、感情表現の振幅の大きさという点で異彩を放っている。第1楽章は勢いよく駆け上がるような主題で開始され、元気いっぱい。調子に乗って、いくぶん空回り気味にも。第2楽章は典雅だがどこか虚ろな気配を漂わせる。第3楽章はスケルツォ。リズムがトリッキーだ。第4楽章は珍しくも「ラ・マリンコニア」(憂鬱)の標題が添えられている。極端な鬱状態と躁状態の対比はほとんど戯画的。躁と鬱は隣り合わせということか。

弦楽四重奏曲 へ長調 Hess 34 (作曲者によるピアノ・ソナタ作品14-1の編曲)

既存のピアノ曲を室内アンサンブル用に編曲すれば、大量のレパートリーを経済的に手に入れることができる……というのは楽譜出版社の考え方。当時流行していたというその種の編曲に対して、ベートーヴェンは批判的な見方を示し、ブライトコプフ&ヘルテルに対して「モーツァルトのピアノ曲を他の楽器に編曲できるのはモーツァルトただひとり。私の作品についても同じ」と述べた。そして、求めに応じて1曲のみ、ピアノ・ソナタ第9番 ホ長調 作品141を弦楽四重奏曲に編曲する。原曲の作曲は1798年、弦楽四重奏版は1801年から02年にかけての編曲。第1楽章は明朗で清爽。第2楽章はメヌエット風ともスケルツォ風とも。第3楽章はチャーミング。上機嫌なユーモアを漂わせる。

弦楽四重奏曲第12番 変ホ長調 作品127

1824年、ベートーヴェンはかねてより新作を依頼されていたガリツィン侯爵のために、10年ほど遠ざかっていた弦楽四重奏曲の分野に戻ってくる。後期弦楽四重奏曲の幕開けとなったのが第12番。続く15番、13番とともにガリツィン侯爵に献呈されている。当初、作品は「陽気に」と記された中間楽章とフィナーレへの導入となる楽章を含めた全6楽章で構想されていたというが、結果的に古典的な4楽章構成に落ち着いている。第1楽章は「マエストーソ」と記された荘重な和音の連続から軽やかな主題が姿を見せる。前へ前へと流れる曲想を「マエストーソ」が二度にわたって堰き止める。第2楽章は深遠長大な変奏曲。第3楽章はピッツィカートの「ジングル」で幕を開ける獰猛なスケルツォ。第4楽章の空高く旋回するような楽想は、いつまでも終わらないのではないかという錯覚を抱かせる。幕切れはどこか名残惜しそうだ。